

自己実現モデルとしての『崖の上のポニョ』

森下温美（関西医療学園）

I. はじめに

何かと崖っぷちの2008年夏、宮崎駿の『崖の上のポニョ』は公開された。不安と神経症の時代を生き抜くためのメッセージがこめられたこの作品を分析することで、現代日本人の自己実現における心理的場所について考察したい。

II. あらすじ

海辺の小さな町の崖の上の一軒家に住む5歳の少年宗介は、ある日、クラグに乗って家出てきた魚の子ポニョと出会う。「ぼくが守ってあげるからね」と言ったが、ポニョは人間を辞めて海の住人になった父フジモトによって海底へ連れ戻されてしまう。しかし、『人間になりたい!』と願うポニョの一念は、父の魔法を盗み出し、妹たちの力を結集し町を水没させながら再会を果たし、人間の女の子として現実に迎え入れられた。

III. 考察

1. 百尺竿頭 「崖の上のポニョ」は、『如人千尺懸崖上樹』という言葉—公案【百尺竿頭】について道元が書き残したパスワード—を連想させる。竿は枝葉を取り払った原理で、自己実現と集合的無意識の関係がユング心理学的に解かれたものであるが、最終目的が西洋理論とは同一でない。ポニョがアンデルセンの『人魚姫』のような結末を迎えるようではわが国の子どもたちは救われぬ。仏性が人間を仏にする如く、見かけは幾多の妹たちと全く同じ一魚にすぎないポニョが宗助に出会って崖の上で人間になるようなことが日本人の自己実現の理想なのだろう。幼子は「高い高い」という遊びのもつ浮遊感を楽しみ、小さな手で空をつかもうとするし、臨床例でも根拠のない一念を温め続けた結果、豊かな変容を遂げるクライアントが存在する。一般にも古事記の黄泉返りをもじった【イザナギ超え】、【キヨブタ(清水の舞台)】を日本人は好むものである。

2. 二重世界 漱石に影響を受けた作者は、『門』において過去と決別して崖下に住んでいたものの、結末において唐突に禅寺に向かう主人公「宗助」を家出(自己実現)願望をもつポニョに出逢させた。【宗】もまたおおもの意で、『架空の原理即普遍』という二重世界に生きる人間性を暗示するポニョ的ネーミングである。そういう意味を付与されたポニョと宗助のこころを結びつける軸が保たれ、人間

世界と自然等あらゆる対立もまたダイナミックに結びついてゆくとき出現する【水没する町】というモチーフは、回避すべき危険ではなく、二元論を超えた年中行事として受け止められつつ、【一即多】として強く働いている。

3. 一即多 老人ホーム在住の一風偏屈な老女トキが、クライマックスの重要な瞬間に突如宗助を導く。作者の実母の記憶、タイミングとしての時(とき)—心理療法でのクライマックスが、共時的に現実を大きく巻き込み変化させながら終結を迎えるように、ポニョの妹たちが塊になってポニョを崖の上に押し上げる—、特別天然記念物ニッポニア・ニッポン等、異熟し変化し続ける作者の生きた阿頼耶識から生まれた老女は、羽を広げたトキがその美しさで人のこころを打つように、物語を1つに纏め上げていく。トキはシャーマン的であり、『老賢者』的な存在である。

4. 治療的態度と自己実現 凡夫からわがまま扱いされる『かぐや姫』が月の世界の人となるように、童謡『金魚の屋敷』さながらに赤いべべ着たポニョは目覚めてこの世の食べ物を食べ、海底を飛び出して人間になった。ヒットしても家出を続けると宣言するポニョは、不退転の象徴であり、魂の停滞を何処までも拒絶する。父フジモトに象徴される傲慢さは、『かぐや姫』の作中エリートたちと翁らが東になったものの如く無力である。河合隼雄は、本当に【傾聴】すれば子どもたちは宗教的哲学的に深い表現のなか自己治癒することや【子どもの宇宙】を尊重することの大切さについて書き残しているが、作品はそのお手伝いが普通の5歳の子どもにも可能であることを示している。宗助にかぎらず登場人物はみなユニークでいわゆるよい人たちではないが、それぞれの【面目】で自己実現に寄り添っており、どこか『めだかの学校』を思わせる。心理臨床家も彼らのこころで寄り添えばよいのではないだろうか。

IV. 終わりに

ポニョ型の自己実現を目指すクライアントが、教育や治療の名のもとに適応論的に嵌め殺されることは少なくないようだ。その二次被害の絶望から人々を開放したい一念で『崖の上のポニョ』は生まれたのではないだろうかと思う。

自己実現・作品分析・治療的態度

モリシタ アツミ

自己実現モデルとしての『崖の上のポニョ』

森下温美 (関西医療学園)

1. はじめに

何かと屋つぶちの2008年夏、宮崎駿の『崖の上のポニョ』は公開された。不安と神経症の時代を生き抜くためのメッセージがこめられたこの作品を分析することで、現代日本人の自己実現における心理的場所について考察したい。

II. あらすじ

海辺の小さな町の崖の上の一軒家に住む5歳の少年宗介は、ある日、クラゲに乗って家出してきた魚の子ポニョと出会う。「ぼくが守ってあげるからね」と言ったが、ポニョは人間を辞めて海の住人になった父フジモトによって海底へ連れ戻されてしまう。しかし、『人間になりたい!』と願うポニョの一念は、父の魔法を盗み出し、妹たちの力を結集し町を水没させながら再会を果たし、人間の女の子として現実を迎え入れられた。

III. 考察

1. 百尺竿頭 「崖の上のポニョ」は、『如人千尺懸崖上樹』という言葉一公案【百尺竿頭】について道元が書き残したパスワードを連想させる。竿は枝葉を取り払った原理で、自己実現と集合的無意識の関係がユング心理学的に解かれたものであるが、最終目的が西洋理論とは同一でないので、ポニョがアフレソの『人魚姫』のような結末を迎えるようではわが国の子どもたちは救われない。仏性が人間を仏にする如く、見かけは幾多の妹たちと全く同じ一魚にすぎないポニョが宗助に出会って崖の上で人間になるようなことが日本人の自己実現の理想なのだろう。幼子は「高い高い」という遊びのつもりで遊戯を楽しみ、小さな手で空をつかもうとするし、臨床例でも根拠のない一念を温め続けた結果、豊かな姿容を遂げるクライエントが存在する。一般にも古事記の黄泉返りをもじった【イザナギ超え】、キヨフタ(清水の舞台)を日本人は好むものである。

2. 二重世界 漱石に影響を受けた作者は、『門』において過去と決別して崖下に住んでいたものの、結末において唐突に禪寺に向かう主人公「宗助」を家出(自己実現)願望をもつポニョに出逢わせた。【宗】もまたおおもの意で、【架空の原理即普遍】という二重世界に生きる人間性を暗示するポニョと宗助のこころを結びつける軸が保たれ、人間

IV. 終わりに

ポニョ型の自己実現を目指すクライエントが、教育や治療の名のもとに適応論的に嵌め殺されることは少なくないようだ。その二次被害の絶望から人々を開放したい一念で『崖の上のポニョ』は生まれたのではないだろうかと思う。

自己実現・作品分析・治療的態度
モリシタ アツミ